座谈学文图语图

國語國文學講座　第五卷

日本文學研究法〔前篇〕　久松潛一

連句講義　能勢朝次

戲曲史〔前篇〕　守隨憲治

東京　雄山閣

昭和九年三月六日印刷
昭和九年三月十日發行

國語國文學講座
〔第五卷〕

版權所有

編輯兼發行者　東京市麴町區富士見町二ノ八　長坂金雄

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　君島潔

印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社

發行所　東京市麴町區富士見町二ノ八　山雄閣
振替東京二四二二七
電話九段〔二〇〕五七七
〔三〕四七一

日本文學研究法 前篇

久松潛一

序說　文學研究法に就いて

日本文學研究法に關する考察をするに當つてその態度に就いて先づのべておきたい。研究法は本來研究をする手續きである。國文學を研究することは國文學の本質を闡明するにあるであらうが、それを行ふ手續きが研究法である。しかしながらこの場合にも研究法に關して起る問題は、研究法の方法ともいふべき方面と、研究法の實踐的方面とがある。この二は互に關聯して行はるべきであつて、研究法の實踐的方面はそれの根本態度によつて期定されるべきである。さうして研究法の方法は如何なる對象性の場合にも妥當する態度であらうが、實踐的方面はその對象性によつて變化を與へられる。いはゞ方法の方法が方法論の不易性であるならば、方法の實踐的方面は流行性ともいふべきであらう。さうして從來の方法論の研究として垣内松三氏の日本文學研究法は常に方法の理論、方法の方法の研究をとかれて居つたに對して、高木市之助氏の日本文學研究法（改造社、日本文學講座）は方法の實踐的

方面をとかれて居る。もつと具體的な方面では武田祐吉氏の萬葉集研究法（萬葉集講座）の如きがあげられる。筆者のかつて書いた「萬葉集を研究するために」（國語と國文學）の如きも武田氏と大體同じ方面に手をつけて見たものに過ぎない。

さうしてこゝで私に課せられた、日本文學研究法も、方法の方法に對しての考察よりも、方法の實踐的方面をとくことを求めたことと思はれる。前者ならば到底私如きものの書き得べき問題ではないが、後者ならば、とにかく過去十數年、研究に近いことを行つてきた、一學徒としての體驗からも何等かの叙述は出來ようかと思つてひきうけたのである。

それで自分は全體を三部に分つて第一章では研究史の立場から、研究段階を分つて、それに對する大體の說明と研究史的觀察とを加へて見たい。研究法の理論も方法もこれまでの國文學研究史の事實の中から歸納されうべき點が多いと見られるからである。それは大體に於て近世國學の研究法と實際を顧みることになるであらう。第二章では研究法に對する自分の總括的見解をのべ第三章では國文學に於ける種々の具體的な問題に就いての方法論をのべて見たいのである。が研究法の組織的な考察といふよりは斷片的な考察に止るであらう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　古典學史より見たる研究法の段階

一、古典文學研究法に就いて

日本古典學史を研究法的に各方面にわけてその方法論と業績とを考察するに當つて方法的自覺を行つたのは近世國學であるから、近世古典學史を主とすることになる。その意味で國學者のなした研究法をしらべその得失を一應批判しておきたいと思ふ。近世國學者のなした業績はその方法論に於て殊に古典研究法の提唱として最も注意せらるべきであるからである。

先づ國學といふ名稱と同樣に多く用ゐられた名稱を調べて見る。古學、和學、歌學などある。たとへば契沖の學問に與へられた名稱を見ても

契沖は古今無比の歌學（年山紀聞）

さて古學の道は此僧よりぞかく開けそめける（古事記傳）

國學ニ委ク古語ヲ發明ス（諸家人物志）

國學ヲ契沖ニ學ブ（諸家人物志）

とある。契沖を國學といふのには異論もあらうが、自分は契沖を國學の先驅と考へて居るし、また古くから國學といつた事は明らかである。是等の名稱に就いて一應考へておきたい。和學とは「日本に關する學問」といふ如き意味に用ゐられて二條冷泉家の學問も契沖、春滿、眞淵、宣長の學問もすべて包攝するのであつて元祿を初めとして起つた傳承を破壞し、自由研究を中心とする新學派をさす學問とはならないのであつて、言はゞ佛學、漢學等に對する概念である。日本學もしくは後に說く廣義の國學と同義と見てよいのであらう。さうして歌學とは支那に於ける詩學、西洋に於ける Poetics の如く歌に關する學問であるが歌そのものの本質的意義を明らかにしこれを組織的に考察する事を中心とした學問である。もとより從來の歌學は學的には不完全で雜然たる所が多いけれども所謂和學の中の歌といふ形態に限つた名稱であつて近世の國學者達の研究對象も萬葉、古今といふやうな歌が主なる對象となつた事は事實であるが歌のみではないのであつて、從つて國學の中の特殊方面といふべきである。かつまた歌學も和學と同じく日本學問史に於て中世にも存し得るものであつて契沖等の稱へた學問を中世學問と區別する意味に於て何等の功をもなさないのである。かくて近世學問としてこれを中世學問と區別するための概念としては和學歌學ではあきたらないのである。古學といふのは「ふることまなび」とも稱へられるが、單に古い事を學ぶといふ意味のみではない。中世の傳承を離れて古文獻に對して自由なる研究を爲す事を指すのである。研究の對象を古に取るといふ意味ではなくて態度方法に於て中世學問の因襲を離れて古文獻そのものによつて研究するといふ意味である。故に宗祇も北村季吟も萬葉集を研究してゐるに拘らず古學とは稱せられない。清水濱臣、藤井高尙は平安時

代文獻を主として研究の對象としてゐるに拘らず古學と稱せられ得べきである。この意味に於て長流、契沖が中世の傳承を破り、古文獻そのものを直ちに客觀的批評的に研究する態度方法を始めたのはたしかに古學といふ學問的名稱が語つて居る內容を表して居るのである。而してこの古學といふ概念の中には日本に關する學問といふ意は含んで居ない。中世に對する古代であつて外國對日本といふ觀念は無い。從つて契沖とほゞ同時に儒學に於て稱へた山鹿素行、伊藤仁齋、荻生徂徠の學問も古學であり、歐洲で十九世紀の初めからヴォルフ、ベエーク等によつて稱へられた Philologie また古學（altertums wissenschaft）であるのである。この意味に於て古學といふのはその對象といふよりはその方法論を示す意味に於て適當なる名稱であつたのである。然らばこの古學と國學とは如何なる關係にあるか。

國學といふのは既にのべた如く日本を知る學問であり國家的中心を主とした學問であるが、さうすると內容的な名稱といふ事が出來る。これに對して古學は古文獻を對象とした學であり同時に古文獻によつて古を知るといふ意味に於て方法的な意味がある。さうすると

國學——內容——目的

古學——形式——態度方法

といふ事が出來ると思はれる。さうしてこの國學の內容を主として見ると古道とも近づいてくるのである。而してこの態度方法といふ上から見ると古學といふのは文獻學といふ名稱とも近づいてくるのである。この文獻學といふ

のは文獻を基礎とした研究といふ意味であつて今日書史學といふ意味にも用ゐられて居るが、むしろ古學といふ如き意味に近くなるのである。さうしてこの文獻學といふ名稱の根源である歐洲の Philologie に就いて少しく考へてみたい。

歐洲の文獻學はバウルによればその起原は十七世紀（ハルストルフの Specimen Philologie Germanie 1646）であるがその榮えたのは十九世紀の初頭啓蒙思想に反して起つた新人文主義と同一であつてウォルフ（一七五九）、ベエク（一七八五）に至つてほゞ學問的體系をたてられたのである。さうして文獻學といふ名辭の指示する內容の最も簡明なる說明としてはベエクの所謂 Erkenmenh des Erkonten（認識せられたる事を認識する事）といふ語で盡される。卽ち一の與へられたる國民に於て政治的社會的文學的構成の再造である。其後バウルは文獻學は人間の精神によつて作られたものの認識であるといひ、キヨルチングは文獻學は一國民もしくは一國民集團の特殊の生活を佶語及び文獻に於て表現せられたもしくは表現せられる範圍內に於て認識する事を任務とし目的とする科學であるとし、次第に明瞭になつてきた。而してこの認識するといふ意味はありのまゝに理解する事である。古人の意識したそのまゝのものを理解するのであつて、中世のやうに或は後世の宗敎的偏見を以て古人意識に色づけられたものであつてはならない。主觀的偏見を去つて純客觀的でなければならない。而してこのためにすべて古代の文獻により文獻以外のものによつて任意に想像する事を有さないのである。こゝに文獻學なるものが學問として成立する所以の存するのである。

かくて文獻學の目的は一言にして言へば文獻に徵して古代文化を闡明せんとする點にある。文獻學は古文獻を通してその中に現れたる文化を知らうとするのであるから、言語の研究をも忽諸にする事は出來ない。從つて文獻の理解のためになさるゝ註釋及び言語研究は最も重んぜられた所である。然しながら文獻學と言語學とは目的に於て異なつて居る。この點をエルツエは述べて

言語學者と文獻學者との相違は前者は言語を言語自身のために研究するのであるが、後者はそれに對して主に全體の文獻に於て表現せられたる一國民の文化現象を學ぶためである。前者はかく言語が目的であり後者は手段である。

と區別してゐるのは文獻學の目的をも明示するものである。文獻學の窮極の目的は國民文化の闡明である。對象を言語に取るけれども目的は言語そのものではなくして言語を通じて見たる國民文化である。(勿論この場合に國語が國民文化の一要素であることは言ふまでもない)而してまたその文化の中心を流れる文化精神である。而もその文化精神は古人に認識せられたるものの如實の再現でなければならぬためにその文獻に一々證據を求めてその古文獻の與へてくれる事實によつてその文化現象を明らかにし、文化精神を理解するのである。かくの如く考へる時文獻學は其本質は文化學であつて其形式若しくは方法論に於て文獻學であるといふのは必ずしも誤でないであらう。この場合に文獻學はバウルも「かつて何人も最上古より最近世に至る全ドイツ文化を取扱つたものはない。近世は除外したのである。」(バウル、ドイツ文獻學原論)と言つて居る如く上代文化であり、かつ一國文化に限られてゐた

感がある。即ちドイツ文化學の本質はドイツ上古文化學と言ひ得ると思ふ。歐洲文獻學が國學（National wissen-schaft）古學（Alterturnswissenschaft）と言はれるのもまた此意味に於てである。かくて今文獻學を圖式にするならば

文獻學
- 目的……文化（上古）……內容
- 態度方法……文獻的……形式

の如くなる。これを日本の國學と比すると國學が古學によつて古道を明らかにしようとするに反し、文獻學は文獻によつて古文化を明らめんとするのである。而してこの古道が古代の文化精神と見るべきものである上に於て彼我の間に極めて類似多き事を知るのである。但し日本の國學は古道を後世の宗教としようとする所に異なる所のあるのは前述した所であるが、古文獻によるといふ態度方法に於ては全く同一である。而してこの態度方法論を主として表すには文獻學と稱する方が寧ろ適切なるを覺える。更に言へば文獻學はやゝもすれば書史學の意味にとられやすいからむしろその對象として古典を主として居つたといふ點からその範圍を限定する上に古典學といふ方が適當しては居ないかと思ふ。

この立場からもう少し研究法を分解してみたい。

ベエクは研究法を二大部門に分ち、一は材料論（Material）一は形式論（formal oder Instrumental）とになした。材料論に於ては言語及び文學に制限せず一國民のすべての道德的及び精神的活動をも含み形式論は更に二大門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に分ち、一を註釋（Hermeneutik）二を批評（Kritik）となした。（Elze. p. 10—11）

この分け方は形式論は長くこれを用ひられバウルやエルツエなども之に從つて居る。たゞその細目に至つては次第に複雜に分類された。

エルツエに至つては同じく註釋と批評とに分つ外に地理、歷史、古代私的生活更に文學史、言語史に分つた。バウルに至つては方法論に於て註釋、批評（本文批評及び美的批評）言語史、文學史を說き、方法論以外に本論に於て、神話英雄傳說、詩句學、經濟、法律、軍事、風俗、藝術、ドイツ民族學等について論述して居る。而して批評は一般に本文批評、美的批評とに分たれて居るのである。是等の方法にもとより多少の缺點がある。たとへば本文批評と美的批評を批評の中に入れてゐるが、この二は本質に於て異なるものでたゞ批評作用といふ點にのみ一致するのみである。從つて本文批評は批評とはなして純粹基礎的な問題として註釋以前におくべきものであると考へる。またドイツ文獻學に於ては餘りに分析に密であつて綜合に粗なる傾きがあり全體を直觀するといふ傾向を輕んずる傾向がある。がそれらの各部門に對する研究法は精密であり日本の國學よりも一層精細なるものがあると思ふのである。こゝではこのドイツ文獻學の立場をも參照し國學の研究方面をも參考して

書史學的研究

本文批評的研究

註釋的研究

文學批評的研究

文化史的研究
- 語學的研究
- 有職故實的研究
- 神道的研究

に分ち、それ〴〵の研究法の概念を考へるとともにその研究史的觀察をもなして見たいと思ふのである。さうしてこの各方面を考察した後に研究の統一的精神としての

直觀——分析——綜合

といふ點に就いて考へて見たいと思ふ。

二、書史學的研究とその研究史

文獻を基礎にして行ふ研究に於ては先づ第一に着手せらるべきは文獻そのものに對する研究である。古代文獻を基礎にしてその中に現はれる古代の文化を考察するには先づ文獻そのものゝ成立また文獻そのものゝ批判を行はなければならぬ。萬葉集の研究には萬葉集の成立、萬葉集の本の研究といふやうな點を考察しその上で種々の方面の研究に進むべきであらう。かういふ書物の歴史の研究これを書史學的研究(Diplomatics)と稱するのであつて、近頃普通に文獻的研究と稱するのは多くこの書史學的研究を指すのである。而してこの書史學的研究は歴史學の方面

に於ける古文書學の如く古典文學を研究するには當然なすべき一作業と思ふのである。卽ち材料が種々複雜して其眞僞に對する疑問も多く殊に書物の傳來の結果種々の異本を生じて居るのが古典文學の通例であるから、それらに對する鑑別の爲にどうしても書史學的研究の關門を經なければならぬのである。而してこの書史學は書物の內容のみならず外形の調査をも必要とするのであつて、そのために古筆學卽ち筆蹟研究も必要になり其時代に使用せられた紙筆に關する知識また文獻の體裁等に關する知識も必要になつてくるのである。奈良時代の紙は麻紙、穀紙などがあり、平安時代には鳥の子が多く用ゐられるに至つた。而して書物の形も最初は普通卷子本であつた。これは卷物であるが後には粘葉、胡蝶裝となり、更に近世では普通冊子本が行はれてゐる。紙に就いては延喜式卷十三圖書寮の所にも

風造紙者調布大一斤、斐皮五兩、造色紙三十張、穀皮斐皮各一斤、造上紙各卅張

などある。

次にこの書史學的研究の作業を考察して見るに第一になされるべきは文獻及びそれに關するあらゆる材料の蒐集である。古代文獻の研究には古代文獻及び其等に關するあらゆるものを先づ蒐集しなければならぬ。其等の材料は長き時代の經過のため或は組織し或は所在不明になつてゐるものもある。殊に日本の如き公園圖書館の發達の極めて微々としてゐた從來の弊のために材料が所在不明になつてゐる狀態にあるために殊に文獻の搜索蒐集は必要になつてくる。既に文獻の蒐集をなすとともに是等の蒐集されたる材料を整理して、これを目錄する必要が起るのであ

る。材料をたゞ亂雜に蒐集するのみでなくこれを分類整理して目錄すべきである。卽ち第二として目錄の作製といふことが起る。この場合に種々の方法がある。

第一は年代的に材料を蒐集するのであつて伴信友の史籍年表の如きこれである。この編年體を第二に著者によつて蒐集しこれを年代的に列ねると赤堀又次郎氏の日本文學者年表や森洽藏氏の日本文學者年表續編の如きになる。

この種の書目は近世にもかなり多く堤朝風の近代名家著述目錄や中根肅の慶長以來諸家著述目錄の如きこれである。第二は文學の種類或は問題によつて分類目錄するのであつて仁安（六條天皇の時代）の和歌現在書目錄、朝倉無聲の日本小說年表の如き大きな分類のもとになされるものと更に小なる問題によつて蒐集されるべきものとである。而して古代文學の研究をなすに當つては一の古典に關するあらゆる材料を蒐集分類目錄すべき必要があるのである。源氏物語の研究には源氏物語の古寫本、研究書及びそれに關係したあらゆる書目をあつめてこれを分類目錄すべきであつて木村博士の萬葉集書目の如きがあらゆる古典にそれ〴〵必要である。

第三にこの文獻の目錄とともにこの文獻に對する眞僞の精査、文獻成立の歷史或は文獻の形式及び內容に對する一般的記述或は文獻の價値批判等に對しての解說を要する。

卽ち解題であつて前述の目錄的研究はこの解說的研究と相俟つて完全するのである。從來作られた文學史は編年體にかゝれた文學書解題とみなさるべきものが尠くないのである。而してこの解題には問題或は文學の種類によつて編まれたものが多く、赤堀又次郎氏の國語學書目解題の如き平出鏗二郎氏の近古小說解題の如きこれである。更

に一個の古典に關する書目解題としては木村正辭氏の萬葉集書目提要の如きものであらう。かくの如きはすべての研究の基礎的事業として最も必要の點である。

以上の如く、1文獻の搜索蒐集、2文獻の目錄、3文獻の成立性質等の解題これを總括して書史學的作業と云ひたいのである。これらは一方に於て實用的方面としては圖書館學に於てなされるべき作業であるが、更に文獻學的研究を行ふ上に基礎研究として最初に着手すべき作業である。

然らば近世國學に於ける書史學的研究は如何であるかといふに第一の文獻の搜索蒐集は一方に於ては文庫、圖書館となり一方に於ては印刷術の發達とともに文獻の刊行といふこの事業に於て發達してくる。日本に於ける圖書館のはじめは石上宅嗣の芸亭であり、また院政頃には惡左府賴長や藤原信西の如きは多くの藏書を有したと云はれ、更に金澤文庫や足利學校の如きもその大きな蒐集であるが近世に於ての蒐集も多く見られる。殊に諸侯の中では水戸の德川家と前田家との蒐集の如きは最も著しきものである。水戸光圀は大日本史編纂や萬葉集校訂のためではあつたが、四方に人を遣して古寫本を集めもしくは騰寫させた。萬葉集の如きも中院本、飛鳥井本等を集めたのであつて、これらの材料が國學者の先驅である契沖の萬葉研究の重要なる材料となつたのであるから、水戸家の諸本蒐集は直接、國學の原動力となつたといつても過言ではない。水戸光圀はどこまでも學問研究の基礎としての蒐集であつたために單に珍本と云ふよりは直に學術的材料となるのを期待したのに對して、前田家の松雲公はさういふ問題から離れてすぐれたる資料を蒐集されたために原本が多く存する。定家筆の土佐日記、源氏物語、傳淸輔の古今

集、鎌倉時代書寫の枕草子、傳公任筆の十五番歌合など極めて多くのものを藏するのである。是等は近世國學には直接影響は尠かつたやうであるが、現在多くの寄與を與へて居るのである。保己一の和學講談所や屋代弘賢の不忍文庫は個人の驚くべき蒐集をなして居るのである。かういふ蒐集は一面には資料の刊行となるのである。が近世に於てこの刊行といふ事に驚くべき業績を擧げて居るのは、塙保己一の群書類從、續群書類從である。近世にはこの他水野忠央の丹鶴叢書の如きもあるが、保己一の群書類從の刊行はその最も著しきものであらう。保己一の學問は歴史上の研究としての文化史的研究は少しくあるが、直接國學とは云ひ難い點があるが、しかしその基礎的作業としての書史學的研究としては大きな功績があり、契沖や本居宣長の如きとも匹敵するものがあるといふも過言ではない。彼の類從刊行が彼にとつて一生の心血をそゝいだ事業であつた事に就いては彼が類從を開板する時

此書の趣意は本朝の古書多くありといへども世々の兵亂度々の大火につきて過半亡失す。今其幸に殘れるもの一千貳百七十三種集めて六百七十冊となし梓に上て以て不朽に傳んことを思ひ、去安永八亥年より天滿宮に祈誓して每朝鹽味をたち般若心經百二十卷を讀誦し開板の速にならむをねがふのみ

と記した如きによつても知られるが、而も大部のものを除いて卷數の尠いもののみを刊行したのはその亡失を救ふ意味に於てどれほど效果のあつたかは言ふまでもないのであつて、群書類從によつてはじめて散佚を免れたものは極めて多いのである。

かくの如き蒐集刊行についてその書目の編成といふ事は次に行はるべき點である。この點についても古くから目

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com